HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	サヴェジ基礎論における「結果」の概念
Author(s)	園, 信太郎
Citation	經濟學研究, 59(2), 19-21
Issue Date	2009-09-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/39319
Type	departmental bulletin paper
File Information	59-2_002.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

経済学研究 59－2
北海道大学 2009.9

サヴェジ基礎論における「結果」の概念

園　信太郎

1．はじめに

サヴェジ氏の基礎論 Savage（1954, 1972）における「結果，consequence」の概念は重要な概念だが，決して平明なものではない。「行為，act」と「世界，world」の「状態，state」とがもたらす窮極的な「むくい」が「結果」であり，「経験」という言葉を持ち出せば，それは「純粋経験」であり，「収入」という言葉を持ち出せば，それは general income である。ここで「結果」を荷うのは，「その行為」を選択した「個人，person」であり，「それ」をその一人（いちにん）が孤独に荷うのである。この究極的報酬は，いかなる外物によっても決して近似できない，とことん個人的なものである。

この「結果」を，サヴェジ氏の枠組では，それをもたらす「行為」から分離して，言わば単離して，あたかも「くじ」の「賞」のように取り扱い，想像的実験の場で，「結果たち」をもたらす多様な「くじ」を導入することができるようにするのである。このような「くじ」は，いかにそれが非現実的ではあっても，サヴェジ氏の枠組からすれば，皆「行為」と呼ばれるのである。

2．晴れの日の土砂降り体験

天気に関る「行為」によって，サヴェジ氏の流儀を例示しよう。今日これからの天気を，「晴れ」，「曇り」，「雨」に「その個人」は分類し，各に対する自身の報酬を，象徴的に，「清清しい体験」，「陰鬱体験」，「惨めな土砂降り体験」としたとしよう。そこで「その個人」は，自身の想像的実験の場において，これらの報酬を単離して，改めて「世界の状態」に結びつけて，例えば，「晴れの日の土砂降り体験」，「曇天の陰鬱体験」，「雨の日の清清しい気分」，というような「行為」を創出したとしよう。「個人」の実験の場においては，「自然な」行為も，創出された「非現実的な」行為も，偏見なしに冷静に見積られるのである。この見積もりの基礎となるのが，「その個人」の「確率」及び「効用」である。しかも，この「確率」及び「効用」は，やはり「その個人」の想像的実験の場で，合理的に見積られるのである。

3．「効用」は何に宿るのか

「「効用」は何に宿るのか」というのは，経済学及び統計学の深刻な論点だが，サヴェジ氏の枠組からすれば，「効用，utility」は上述したような言わば個人的「むくい」に宿るのである。この立場からすれば，「個人」が消え去れば「効用」も消滅するのである。

一方，「確率」とは，「もの言わぬ営みにおいて発露する智」であり，この「智」は「個人」に宿るのであり，やはり「個人」がなければ「確率」もないのである。

サヴェジ氏にとっての「結果」とは，記号列によって「示唆」はできるであろうが，「近似」はできない個人的「経験」である。この「結果」の概念をサヴェジ氏は自身の枠組の「弱点」と見ていたようだが，筆者は，言わば生産的「弱点」であり，彼の理論を「おもしろく」していると判断する。

例えば，経済学及び統計学で問題とされるマネー（money）の「効用」だが，これはサヴェジ氏の枠組からすれば，「マネー」と呼ばれる「行為」

の個人的「期待効用」のはずである。しかし，「マネー」の効用に関して「うまい」決定を下す資質に恵まれている個人が，サヴェジ氏の個人的効用，つまり深い意味での「結果」に関しては，「まずい」決定を下してしまうと言うようなことが起り得る。実際，相当に有能なビジネスマンが，「当りくじ」をすてて「はずれ」を選ぶ有様を，筆者は見たことがあるし，ある財産家が「不合理」な選択をした例も知っている。つまり，マネーについての上手が，自身の人生の窮極的「むくい」については終に失敗することは，充分に起り得るのであり，サヴェジ氏の「結果」概念は「生きている」のであり，単なる理念物ではない。

なおサヴェジ氏の枠組での「小さな世界，small world」では，マネーに対する「効用関数」が当たり前のように利用される。そのような「関数」のある意味で合理的な例を，Bayesian の立場を取る J. W. Pratt が 1964 年に公表しているのだが，サヴェジ氏はこの Pratt(1964)を高く評価している。これは，constant local risk aversion を表現する効用関数として知られるものだが，サヴェジ氏は perfect miser の効用関数と考えている。しかし「大きな世界，grand world」からすれば，マネーの効用関数は，「マネー」と呼ばれる「行為」の個人的期待効用の表現なのであり，「大きな世界」での「むくい」こそが，本来の関心事でなければ「ならない」はずなのである。本来の「効用」は外物に宿るのではなく，個人的「むくい」に宿るのであり，この「真実」を我我は失念すべきではない。

4．付記

「利」と「得」とを分けて考えて見るとサヴェジ氏の論点がより平明になるかもしれない。「利」は有利，不利という場合の「利」だが，勝負やビジネスに関する表層的な「結果」を捉える際に用いるとしてみよう。「得」の方は「徳」に通じて，自身の身で一人荷うこととなる(自身の)持ち前となる。このような差が，何故か傍観者に「わかる」ことがある。つまり例えば，相撲の勝負だが，「なるほど横綱の勝ちだが，内容は実にまずいものであった」と評される場合では，我我は，表層的な勝ち負けのみではなくその内訳をも敢えて問い質しているのである。棋士同士の勝負でも，「彼は負けたが，名人を相手になかなか善戦した」などと評する場合，「利」のみでなく「得」を問題としているのである。元来「得」とは個人的なものだが，鋭敏な観察者はその所在を「感じる」のである。表層的な「利」に迷い，本来の「得」を失念することは，多分ビジネスにおいても用心すべきである。それぞれが各の器に応じて，「得」か「不得」かを深く問うことは決して実業上も無駄な「出費」ではあるまい。

サヴェジ氏の「効用」は，「得」に宿るのであり，「利」とは「得の効用」についての(「小さな世界」での)「期待値」であり，「得」とは，「個人」にとっての「大きな世界」での本来の「持ち前」である。責任が事実上重い職にある人物には，深い意味での「不得か得か」の見極めを決して失念して欲しくはない。

参考文献

Pratt, John W., “Risk aversion in the small and in the large,” *Econometrica*, Vol. 32, No. 1-2, 122-136, January — April, 1964.この力作をサヴェジ氏は，A valuable contribution to the theory of utility.と評価している。しかし，サヴェジ氏は言及していないが，この力作の一部には数式上の過誤がある。これについては，*Econometrica*, Vol. 44, No. 2, 420, March, 1976, にある ERRATUM を参照すべきである。この過誤を(多分最初に)見出したのは John V. Lintner, Jr.である。

Savage, Leonard Jimmie, The Foundations of Statistics, Second Revised Edition, Dover Publications, New York, 1972. 第一版は，John Wiley & Sons, New York, より 1954 年に出ている。この「基礎論」への一つの「読み」として，園(2001)がある。またサヴェジ氏の思索への一つの「読み」として，園(2007)がある。

園　信太郎，『サヴェジ基礎論覚書』，岩波出版サービスセンター，東京，2001 年 12 月 20 日。

園　信太郎，『サヴェジ氏の思索』，岩波出版サービスセンター，東京，2007 年 8 月 31 日。

2009 年 5 月 11 日(月)